

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：84418

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02022

研究課題名（和文）近現代日本の社会運動組織による「スクリーンのメディア」活用の歴史・地域的展開

研究課題名（英文）Screen Media and Social Movements in Modern Japan

研究代表者

鷲谷 花（Washitani, Hana）

一般財団法人大阪国際児童文学振興財団・その他部局等・特別専門員

研究者番号：10727100

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、スクリーンへの映写メディアである映画及び幻灯（スライド）を、近現代日本における社会運動組織が、どのように宣伝・教育・記録といった目的に活用してきたかを解明すべく、主に社会運動の一環として自主製作・上映された映画及び幻灯のフィルム・スライド・説明台本といった一次資料の調査に取り組んできた。

本研究プロジェクトの3年間にわたる調査研究活動により、第二次世界大戦後を中心とする日本の社会運動と、映画及び幻灯の自主製作・上映活動の連携の実態や、そうした活動に関わった組織及び人物の動向の一端が明らかになった。また、複数の貴重な一次資料を発掘し、修復及び保存、公開を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究プロジェクトの3年間にわたる調査研究活動により、近現代日本の社会運動に関連する映画及び幻灯の製作および運用の実態、労働組合と映画サークルといった複数の運動組織の連携の状況と、その間を行き来しつつ、自主製作・上映運動に関わってきた個人の動向が把握されつつある。近現代日本において社会運動史と映像文化史がどのように交錯してきたかについて、具体的な資料に基づく新たな知見を得ることができた。本研究プロジェクトによって発見した中には、セロファン紙を用いた透過式代用フィルムなど、破損リスクの高い資料が含まれていたが、これらの修復・保存及び公開を試行したことで、同種の資料の扱いについて有益な知見を得た。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we investigated how social activists in modern Japan have used screen projection media such as films or lantern slides for propaganda, education, and documentation of their activities. We have collected and researched primary materials such as films, slides, or scripts that were independently produced and screened as part of social movements. We have revealed several facts about important cooperation between social movements and independent production and screening of films and lantern slides in post World War II Japan. We have also revealed relationships between organizations and individuals involved in such activities. In addition, we were able to discover, restore, preserve, and open to the public a number of valuable primary materials.

研究分野：映画学、日本映像文化史

キーワード：スクリーン 幻灯 映画 社会運動 労働組合 サークル 大政翼賛会 総力戦体制

1. 研究開始当初の背景

本研究が主要な対象とした近現代日本における映画、幻灯(スライド)等の「スクリーンのメディア」は、作家が芸術的創意を發揮する「作品」、企業が生産し市場で利益を得る「製品・商品」、国家権力の意志を伝達する「プロパガンダ装置」のほか、社会問題の解決をめざす運動組織の教育・宣伝・記録メディアとしての機能も担ってきた。しかし、従来の主要な研究は、映画の「作家の作品」「企業の製品・商品」「国家のプロパガンダ装置」としての側面にもっぱら関心を集中させてきた一方、「社会運動のメディア」としての側面については、副次的な言及にとどめる傾向があり、また、「作品」「製品・商品」「プロパガンダ」、そして「運動」の複数の側面が、相互にどのように関連し、連携してきたかについても、未知の部分が大きかった。また、静止画のスクリーン拡大映写メディアとしての幻灯については、19世紀末から20世紀初頭にかけて映画産業が確立し成長する「以前」に全盛期を終え、以降は衰退の一途を辿ったものと認識されてきたため、映画「以後」の幻灯の歴史や、社会運動における映画と幻灯の相互補完的な活用の状況については、従来はほとんど知られてこなかった。

2014年には、19世紀末から20世紀初頭の欧米の社会運動と、幻灯と映画を包含する「スクリーンの文化」の関連性をテーマとする論文集 *Screen Culture and the Social Question 1880-1914* (Richard Crangle and Ludwig Vogl-Bienek [ed]). UK; John Libbey Publishing Ltd) が刊行されているが、これに類するアプローチの研究は、日本の「スクリーンのメディア」に関しては、いまだに未成立だったといつてよい。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトは、主に第二次世界大戦後の日本における労働運動、平和運動、人権運動といった諸々の社会運動における「スクリーンのメディア」の自主的な活用の実態を明らかにすることを目的として開始された。第二次世界大戦後の「スクリーンのメディア」といえば、一般的には映画を意味してきたが、本研究では、第二次世界大戦期に国策プロパガンダに動員されることで復興した幻灯が、戦後も引き続き発展し、映画とも連携しつつ、社会運動の教育・宣伝・記録メディアとして大いに活用されたことにも注目した。

本研究は、明治期以降の社会運動における「スクリーンのメディア」活用の歴史を概括したうえで、そこでの理念や実践が、第二次世界大戦後の日本の社会運動によってどのように継承されたかを解明することを試みた。また、第二次世界大戦期の戦時総動員体制下で、「スクリーンのメディア」の「国策」に資する非商業的な利用が推奨されたことが、占領期のGHQ/SCAPの視聴覚教育の拡充政策とも相まって、戦後の社会運動による幻灯及び映画の積極的な活用を可能とするだけの社会資本及び環境を形成した可能性についても検証した。

近現代日本の社会運動における「スクリーンのメディア」活用に関連する一次資料(映画及び幻灯のフィルム・スライド、脚本等)は、現状では多くが散逸、未整理、未公開の状態にある。映像及び文書資料の所在の把握と掘り起こし、整理を通じて、調査・研究の基盤となる資料体の拡充に取り組み、関連資料を所蔵する各機関との連携を確立し、適切な保管・利用・公開体制の整備を進める喫緊の必要があった。また、発見した映像資料の内容を精査し、「記録」性、「作品」としての創造性といった多様な価値を確認することも、本研究の重要な目的となった。

3. 研究の方法

本研究が対象とする、社会運動の一環として自主製作・自主上映された映画及び幻灯は、商業的な作品に比べて流通本数が限られていたため、現状では多数の一次資料が消失、所在不明、未公開の状態にあるものが多く、また、著作権保持者・継承者の所在が明らかではないため、資料が現存していても、復元・複製や公開に支障がある場合も多々ある。本研究では、神戸映画資料館及び徳島キネマミュージアムをはじめとする民間のフィルムアーカイブ、大原社会問題研究所をはじめとする社会問題・社会運動の資料を多数所蔵するアーカイブでの資料調査を行い、従来は現存を確認されていなかった、映画及び幻灯のフィルム、幻灯の場合はフィルムに付属して頒布されていた説明台本といった貴重な一次資料を数点発見した。また、発見した資料の復元・複製・公開のために、著作権保持者に連絡を取ってきたが、その過程で、従来は知られていなかった製作・公開時の事情が判明したり、もしくは新たな二次資料の提供を得られる場合もあった。

第二次世界大戦後の日本の社会運動における「スクリーンのメディア」の活用にあたっては、職場や地域の映画サークルが、機材・フィルム等の融通や、連絡、観客動員等に際して重要な役割を担ったことが判明している。神戸映画資料館及び京都大学人文科学研究所に所蔵されてい

る映画サークルの内部資料を調査することで、社会運動の一環としての映画・幻灯を使った活動の全国的な動向を、ある程度把握することができた。

新たに発見した映画・幻灯等のフィルム資料に関しては、著作権保持者・継承者の許諾を得たうえで、デジタルスキャンを行ない、さらにオリジナルの形態をより忠実に再現するために、上映・保存用の複製ポジフィルムを作成した。COVID-19 パンデミックの到来より前には、神戸映画資料館、山形国際ドキュメンタリー映画祭ほかでフィルムと幻灯機を用いた一般向けの上映活動を行ったが、これらの上映活動は、新たな資料や情報の提供を得る機会ともなった。

4. 研究成果

2018 年度に徳島キネマミュージアムの所蔵フィルム資料調査を行い、近藤日出造作画の民主選挙啓蒙幻灯『新日本の種まき』(1946)と、戦時中から継続して製作されていた幻灯によるニュース『幻燈月報』(1947)を発見、IMAGICA に委託して、修復作業を行った。これらは文献にタイトルが記されているのみで、現物の所在は未確認だった貴重な資料であり、戦時総動員体制下で開始された幻灯による社会教育活動が、どのように占領期にも継続されたかを具体的に知る一端となった。

2018 年度及び 2019 年度には、大原社会問題研究所、神戸映画資料館、京都大学人文科学研究所図書室において、社会運動組織による「スクリーンのメディア」活用に関する資料調査を行った。労働組合及び映画サークルの資料調査を通じて、「ドッジ・デフレ」～「レッド・パーシ」期に一般の労働組合運動の勢力が減退した際に、失業対策事業に就労する日雇い労働者(自由労働者)の労働運動が活性化し、それと戦後独立プロ映画の嚆矢としての『どっこい生きてる』の自主製作・上映運動が連動し、さらに全国各地の映画サークルが担当した宣伝活動で幻灯が活用されたことなど、社会運動と映画・幻灯の自主製作・上映運動の連携の実態の一端を明らかにすることができた。

また、上述の調査の過程で、大原社会問題研究所に、1951 年に中国・上海で刊行された連環画本『松川事件』が所蔵されていることを確認し、東京修復保存センターに委託して、修復・保存・デジタル化作業を行った。当連環画本『松川事件』は、確認されている限り、松川事件被告救援運動に関連して最初に制作された画像作品であり、その後の松川事件に関連する紙芝居、幻灯、映画等にかかなり広範な影響を及ぼしたと考えられる。松川事件被告救援運動は、1950 年代から 1960 年代にかけて、出版・印刷、映像、パフォーマンスといった多様なメディアを駆使することで、思想信条・党派の別を超えた大衆の支持を集めることに成功した社会運動だが、今回発見した連環画本『松川事件』は、そのルーツのひとつというべき貴重な資料といえる。

戦後の社会運動とスクリーンのメディアの接点を知る当事者への聞き取り調査としては、人形劇団ブーク団員として、1950 年代初頭のブークによる幻灯・映画の自主製作に関わり、その後人形座団員として活動した石井マリ子氏への聞き取り調査を、2018 年 6 月に実施した。その際の事前資料調査で、高畑勲監督の長編劇場用アニメーション映画演出デビュー作である『太陽の王子ホルスの大冒険』の原作とはなったが、従来ほとんど内容を知られていなかった人形座『春楡の上に太陽』の上演台本を発見し、石井氏へのインタビュー及び閲覧を許可していただいた資料と合わせて、国民的歴史学運動の流れを汲む人形劇が、東映アニメーション映画の初期の代表作に繋がる、従来はほとんど知られてこなかった経緯の詳細を確認することができた。

2018 年度及び 2019 年度には、フィルム資料の上映イベントを複数回開催した。2018 年 12 月 28 日には、神戸映画資料館にて「望月優子特集」を開催し、戦後日本映画を代表する名優であるのみならず、映画監督としても注目すべき存在であり、かつ参議院議員でもあった望月優子が、自由労働者の組合である全日自労の委託により監督した『ここに生きる』を上映し、また、研究代表者の鷲谷花と、映画研究者の斉藤綾子氏により、映画俳優、映画監督、社会運動活動家としての望月優子の多面性を再検討するトークセッションを行った。2019 年 10 月 12 日には、山形大学人文社会科学部附属映像文化研究所との共催により、山形国際ドキュメンタリー映画祭の会期中の自主企画として、2 部構成の上映会「幻灯の映した昭和—絵本と炭鉱—」を、山形大学人文社会科学部にて開催した。第 1 部では、いわさきちひろ、かこさとし、せなけいこら、戦後日本を代表する絵本作家たちが、主に 1950 年代に幻灯の作画を手がけていたことに注目し、幻灯独自の鮮やかな色彩のもたらす視覚的魅力を紹介した。第 2 部では、戦後最大の労働争議としての三井三池炭鉱争議に関連して、日本炭鉱労働組合の指導により自主製作・上映された複数の幻灯を上映し、闘争、失業、貧困といった争議をめぐる多様な側面を、幻灯がどのように捕捉し、かつ支援者に向けて映し出していたかを検証した。これらの一般向けの上映活動を通じて、本研究プロジェクトについて周知されるようになったことから、新たな情報や資料の提供・寄贈を受ける機会も生じることとなった。

2020 年度には、COVID-19 パンデミックの到来により、もっぱらインターネットオークションを中心とする資料収集に注力した結果、太平洋戦争期に文部省及び大政翼賛会の委託により製作され、国策宣伝・教育に活用されていた複数種類の幻灯を収集することができた。昭和戦中～戦後の幻灯の復興は、1941 年に文部省が幻灯の教育利用の再開を決定し、映画と同仕様の 35 mm フィルムの幻灯を映写する幻灯機を「文部省選定幻燈機」として選定し、各地方自治体への設置を進めたことから始まったが、その際に文部省が選定した 2 種類の幻灯機のうち、皆川電気製

造の「神風一号」の現物資料を入手し、さらに、各地方自治体に年度ごとに配布されていた「文部省幻燈画」フィルム3種類を入手し、IMAGICAに委託して修復・復元した。

戦時期には、35mmフィルムを用いた「文部省幻燈画」とはまた別に、資源節約の要請により、セロファン紙、和紙を用いた代用資材幻灯が開発されて流通していたが、これらの代用資材幻灯の現物資料は経年劣化が著しく、画像を確認することが困難だった。本研究プロジェクトでは、大政翼賛会の啓蒙・宣伝活動にもっぱら利用されていたセロファン紙製の「日本幻燈」7点を入手し、複数の業者に相談した後に、東京光音に委託して修復と画面撮影を行った結果、収集したフィルム資料の全コマ画像を確認できた。今回の「日本幻燈」の修復の成功は、今後の類似資料の修復・保存に際しても、貴重な成果となることが見込まれる。

戦時中には、フィルムを透過した光をスクリーンに映写する透過式のほかに、反射鏡を用いて紙製のフィルムに当てた光をスクリーンに投影する反射式幻灯機も利用されていた。2020年度には、研究代表者鷲谷花が独自に入手した「翼賛幻燈」及び、神戸映画資料館所蔵の「日本繪映」の、いずれも紙製フィルムを用いた反射式幻灯シリーズの調査を行い、また、東京修復保存センターに委託して修復・デジタル化を行った。これらの反射式幻灯シリーズには、大原富枝、井ノ川潔などの作家を起用した、対象年齢層の幅広さを覗わせる作品がいくつか含まれており、戦時期の国策教育・宣伝メディアとしての幻灯が、多様な観客に向けて、多様な表現を実践していたことを裏付ける資料といえる。

また、大阪くらしの今昔館の協力により、同館に所蔵されていた透過式のセロファン紙製幻灯フィルム6点の調査及び画像撮影を、東京光音に委託して行った。とりわけ、大政翼賛会の「経済道義昂揚」運動に関連して製作されたものと考えられる「経済道義昂揚」幻灯2点は、別の作者による同タイトルの紙芝居が製作されたことも判明しており、大政翼賛会のメディアミックス的な宣伝戦略の実態を伝える貴重な資料といえる。

2018 - 2020年度の調査・研究の結果については、上述した上映活動のほか、研究代表者及び研究分担者各自が著書、学会誌論文、学会発表等を通じて発表している。2020年度に修復・復元及び画像撮影を完了した資料については、2021年3月25日にオンラインで開催した2020年度成果報告会(一般公開)で報告し、研究チーム一同及び一般の参加者の間で質疑応答を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 鷲谷花	4. 巻 102号
2. 論文標題 スクリーンの「ニコヨン」たち 失業対策事業日雇労働者の映像文化史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 31 53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18917/eizogaku.102.0_31	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鳥羽耕史	4. 巻 8-2
2. 論文標題 On the Relationship between Documentary Films and Magic Lanterns in 1950s Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Arts	6. 最初と最後の頁 64-1-64-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/arts8020064	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鷲谷花	4. 巻 50 - 10
2. 論文標題 美しい悪魔の妹たち：『太陽の王子 ホルスの大冒険』にみる戦後日本人形劇史とアニメーション史の交錯	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 269 - 274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 紙屋牧子	4. 巻 100
2. 論文標題 最初期の「皇室映画」に関する考察：隠される/晒される「身体」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 映像学	6. 最初と最後の頁 32-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18917/eizogaku.100.0_32	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鷺谷 花	4. 巻 116
2. 論文標題 山本明コレクション資料にみる『どっこい生きてる』(1951)上映促進運動の実態	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文學報	6. 最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/262799	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 紙屋牧子	4. 巻 116
2. 論文標題 映画『祇園祭』を伊藤大輔の作家性から再考する -- 「傾向映画」との接続と非接続	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文學報	6. 最初と最後の頁 183-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/262806	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 アンニ	4. 巻 21
2. 論文標題 貫戦期における日中映画往還 延安・満映・東影・日本	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Intelligence	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 5件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 紙屋牧子
2. 発表標題 Digitization of Materials at the National Film Archive of Japan
3. 学会等名 Film Librarians Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 紙屋牧子
2. 発表標題 Japanese Princes go to Europe: Media Strategy of Imperial household from 1910s to 1920s
3. 学会等名 International Workshop “Media History of Japan in the Twentieth Century: Mass Media and Monarchy in Comparison and Beyond (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 アンニ
2. 発表標題 一九五〇年代の中日電影 延安、満映、東影、日本
3. 学会等名 戦後中日芸術交渉：継承と展開 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷺谷花
2. 発表標題 『太陽の王子 ホルスの大冒険』による1950年代左翼文化運動の継承
3. 学会等名 学習院大学身体表象文化学会大会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉原ゆかり
2. 発表標題 冷戦期アジアにおける英米文学のジオポリティックス
3. 学会等名 アメリカ問題、東アジア冷戦文化研究の現状と課題 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷺谷花
2. 発表標題 スクリーンの「ニコヨン」たち - 失業対策事業日雇労働者と映像メディア
3. 学会等名 平成30年度筑波大学比較・理論文学会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鳥羽耕史
2. 発表標題 サブ・リアリズムの射程 美術、文学、映画における底辺・周縁への視線
3. 学会等名 戦後日本の写真史と文化運動 リアリズム のゆくえ(山形大学人文社会科学部附属映像文化研究所)（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷺谷花
2. 発表標題 Lantern Slide (Gento) Media in The 1950s Protest Movements Against U.S. Base Expansion: Focusing on The Appeal from Base Okinawa
3. 学会等名 Forum on Screen Media in Cold War Asia (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 紙屋牧子
2. 発表標題 “Representations of American Army Camp in Post-war Japanese Movies: Men and Women Make “Peace” (講和) in Yassamosa and Akasenkichi
3. 学会等名 Forum on Screen Media in Cold War Asia (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡田秀則
2. 発表標題 シンポジウム「映画資料をめぐる現状とその課題 全国ネットワーク化に向けて」
3. 学会等名 全国映画資料アーカイブサミット2021
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鷲谷花
2. 発表標題 「近現代日本の社会運動組織による「スクリーンのメディア」活用の歴史・地域的展開」2020年度成果報告
3. 学会等名 「近現代日本の社会運動組織による「スクリーンのメディア」活用の歴史・地域的展開」（研究代表者：鷲谷 花）2020年度研究成果報告会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 鳥羽耕史、山本直樹、阪本博志、角田拓也、山崎順子、友田義行、松山秀明、瀬崎圭二、ジャスティン・ジェスティ、ナミコ・クニモト、鈴木勝雄、ケン・ヨシダ、喜田智尊、狩俣真奈、友添太貴	4. 発行年 2019年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 352
3. 書名 転形期のメディアロジー	

1. 著者名 岩本 憲児、アンニ、加藤 厚子、近藤 和都、平賀 明彦、渡邊 大輔、古賀 太、門間 貴志、鄭 琮樺、李 相雨、渡辺 直紀、李 道明、蔡 宜静、秦 剛、ハラルト・ザーロモン	4. 発行年 2019年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 368
3. 書名 戦時下の映画 日本・東アジア・ドイツ	

1. 著者名 坪井秀人（編）、島村輝、鈴木勝雄、川口隆行、鷺谷花、橋本あゆみ、張政傑	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 212
3. 書名 戦後日本を読みかえる2 運動の時代	

1. 著者名 坪井秀人（編）、石川巧、岡田秀則、鈴木貴宇、渡邊英理、長瀬海、中谷いずみ、新城郁夫	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 232
3. 書名 戦後日本を読みかえる3 高度経済成長の時代	

1. 著者名 大久保遼（編）、光岡寿郎（編）、飯田豊、渡邊大輔、林田新、上田学、近藤和都、松谷容作、鷺谷花、溝尻真也、金キョンファ、立石祥子、関谷直也、馬定延、gnck、増田展大、大久保遼	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 416
3. 書名 スクリーン・スタディーズ： デジタル時代の映像 / メディア経験	

1. 著者名 志村三代子・角尾宣信（編）、四方田犬彦・河野真理江・具珉炯・紙屋牧子・鳥羽耕史・坂尻昌平・久保豊・長門洋平・川崎公平・深田晃司・小森はるか・金川晋吾・斉藤有吾（著）、熊谷勲・有馬稲子・香川京子・高橋路子・高橋志保彦（談）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 554
3. 書名 渋谷実 巨匠にして異端	

1. 著者名 Yukari Yoshiwara	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Manchester University Press	5. 総ページ数 283
3. 書名 Shakespeare and the Supernatural	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>2018年12月28日に、神戸映画資料館で「望月優子特集上映」を開催、望月優子の主演作品『末っ子大将』及び監督作品『ここに生きる』を上映し、女優、映画監督、政治家としてのキャリアの再検証を試みた。 2019年山形国際ドキュメンタリー映画祭自主企画として、山形大学人文社会科学部附属映像文化研究所との共催により、2部構成の上映会「幻灯の映した昭和絵本と炭鉱」を、10月12日に山形大学人文社会科学部にて開催した。</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	土居 安子 (Doi Yasuko) (00416257)	一般財団法人大阪国際児童文学振興財団・その他部局等・総括専門員 (84418)	
研究分担者	紙屋 牧子 (Kamiya Makiko) (20571087)	玉川大学・芸術学部・非常勤講師 (32639)	
研究分担者	岡田 秀則 (Okada Hidenori) (30300693)	独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員 (82621)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉原 ゆかり (Yoshiwara Yukari) (70249621)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	アン ニ (An Ni) (70509140)	日本映画大学・映画学部・特任教授 (32726)	
研究分担者	鳥羽 耕史 (Toba Koshi) (90346586)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関